

食玩今昔

政府開発援助

<食玩とは？>

食玩とは、『オマケとして玩具を添付した食品もしくは飲料の様態の総称』と定義されています。食玩の始祖としてグリコを想起する方が多いと思われそうですが、その認識は正しいようです。もともと、創成期（大正時代末頃）は玩具ではなくカードが添付されていたようです。昭和 30 年代後半になると、漫画やテレビ番組のキャラクターにちなんだオマケが付属する食玩が各社から発売されるようになりました。家族の買い物に付いてきた子供に（オマケを目当てに）お菓子を買わせようというメーカー側の作戦な訳ですね。仮面ライダーズナックやビックリマンチョコレート等は子供が大量に購入する様子が大きく報道されたので、ご記憶の方も多と思います。

<「BIG★1ガム」の衝撃>

昭和 53 年に定価 100 円で販売開始されたカバヤの BIG★1ガム（当時の男児の憧れであった、プロ野球読売巨人軍の王貞治選手の愛称にちなんだもの）は画期的な商品でした。ガムも確かにビッグでしたが、それ以上にビッグだったのがオマケのプラモデル（ポリエチレン系の軟質樹脂で成型されており、厳密には「プラモデル」とは異なる）のサイズと豪華な仕様でした。当時 100 円で買えたプラモデル（以前取り上げたと思います）より一回りは大きい上に子供が楽しめるギミック（仕掛け）を備えていたので続々とヒットを重ね、平成に入るまでに数十種類が世に出ました。平成 14 年には復刻版も発売されています。



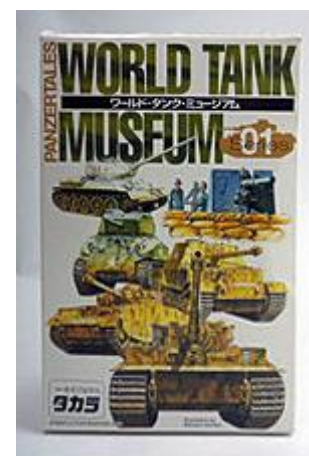
BIG★1ガム（復刻版）。右の丸い窓から中身がわかる良心的な仕様は当時のまま。価格は確か 200 円（税別）

<食玩ブーム到来>

平成 11 年に販売が開始されたフルタ製菓のチョコエッグは、卵型のチョコレート内部に塩ビ製のオマケが入っている（購入するまで中身はわからない鬼畜な）食玩でしたが、オマケの品質の高さが話題になりました。精巧に造型された実在の動物に精緻な塗装が施されているもので、大手ガレージキットメーカーの海洋堂が開発に関わっています。この商品の登場によって多くの方が、食玩＝塗装済フィギュアと認識するようになりました。

<メカ物食玩の逆襲>

チョコエッグのシリーズ後半には飛行機などのメカ物がラインナップされるようになったのですが、塩ビ製品の成型限界から精度の点では今一つのものが多かったようです。そこでプラモデルと同様のプラスチック製のオマケを付ける食玩メーカーが出てきました。プラモデルは塩ビ製



タカラのワールドタンクミュージアム

品に比べて金型代が高価なため、商品単価は 300 円前後のものが普通となりましたが、ワールドタンクミュージアムやウイングクラブコレクションのように販売が長期にわたるヒット商品も生まれました。これらの食玩の多くはカラバリ（カラーバリエーションの略、同一形状で塗装のみが異なる鬼畜な仕様）をラインナップすることで金型のコストが商品に影響しにくいよう工夫されています。

<食玩無法時代>

現在では驚く程高額な食玩が、キャラクター物を中心に続々とリリースされています（そもそもキャラクター物には著作権料が上乘せされるので価格が上昇しがち）。昨今では玩具店や模型店が少なくなっているため、スーパーマーケット等に販路が拡大できる食玩に模型メーカーが積極的に参入を考えているようです。そのおかげで模型店のみの流通では採算が取れないようなアイテムが発売されるという恩恵に預かることができる反面、食玩は販売期間が一般に短いので買い逃すリスクが大きくなるといった問題もあります。

<今回は...>

「ゼロ戦」こと零式艦上戦闘機の食玩を集めてみました。発売時期が現代に近づくにつれて精密度（と価格）が高くなり、プラモデルと比べても遜色のないものになっていることがお判り頂けると思います（比較対象用にプラモデルを用意しました。模型の展示会ですが今回は模型の方が添え物です）。